

プールで遊ぶおもちゃを作りたい

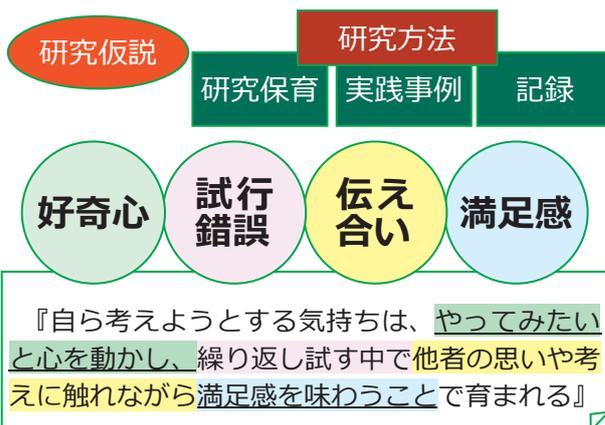
子どもたちの遊びの姿は日々様々であり、保育の記録は、保育者の印象に残っていることが中心になります。このため、主題に関する子どもの姿を見逃さずに捉えて記録にする工夫が重要になります。例えば、「好奇心により自発的、意欲的に遊んでいる」「思いを叶えるために試行錯誤している」「友達と思いを伝え合っている」「最後までやり遂げて満足感を味わっている」など、注目する姿や体験を保育者間で共有して保育をすることで、関連する子どもの姿を見逃すことなく記録ができます。この事例は、「科学する心」を捉えるだけでなく、園の目指す保育の仮説や保育者の願いをもち、「科学する心を育てる」観点で考察することで、子どもの育ちを明らかにしています。

堺市立みはら大地幼稚園

5歳児

1. 「科学する心」の捉え

- ・「自ら考えようとする気持ちが育つようにするための環境の構成や、保育者の関わりについて」の研究を進めて、今年度は4年目になる。『自ら考えようとする気持ちは、やってみたくて心を動かし、繰り返し試す中で、他者の思いや考えに触れながら、満足感を味わうことで育まれる』と考えている（研究仮説）。
- ・保育において、子どもが経験するこの気持ちや行動のプロセスを大切にすることで、「科学する心」が育まれる。



2. 保育者の願い

子どもたちが、身近な事象に好奇心や探究心をもって関わり、自ら環境に働きかけることで試したり工夫したりすることを喜び、友達と考えを合わせるなどして問題を解決し、よりよいものづくり変えようとする充実感や達成感を存分に味わって欲しい。

3. 方法

- 子どもを理解する（子どもの思いに寄り添う・耳を傾ける）。
- ねらいや発達を踏まえ、遊びの質を捉えながら援助を判断する*（保育者の感性を磨く）。
- ※【キーワード…見守る・引き出す・示す・つなぐ・認める（事例では緑太字）】

	年齢別ねらい	好奇心	試行錯誤	伝え合い	満足感
3歳児	身近な環境に関わる中で、いろいろなことを感じ、「面白い」「やってみたくて」と心を動かす	「面白い」「やってみたくて」	「面白い」と感じ、見たり聞いたり触ったりする	「見て」「聞いて」と先生や友達、お家の人などに思わず話す	「楽しかった」「また遊びたいな」
4歳児	様々な環境に関わる中で、自分の思いを出して遊んだり、友達と一緒に考えたり、試したりする	「不思議だな」「知りたいな」	「こうしてみよう」「こうしてみたらどう？」と繰り返し試す	やってみたことや考えたことを見たり、話したりして、情報交換する	友達と一緒に「嬉しい」「こんなことができた」
5歳児	経験を活かしながら、友達と考えを伝え合ったり、よりよい考えを生み出したりする	「どうなっているのだろう？」「考えてみよう」「調べてみよう」	「もっと、見てみよう」「作り替えてみよう」	友達と思いや考えを出し合い、新しい考えを生みだそうとする	「分かった」「やっとなでやり遂げた」

4. 実践「プールで遊ぶおもちゃを作りたい」 6月中旬～7月上旬

【環境の特徴】 園庭には「森」と呼べるような自然豊かな場があり、自然物を遊びに活用している。活動当初、草木の根や葉、竹の皮、木の枝、竹などの素材が集まり、保育者は子どもが常時使えるように設定していた。さらにスズランテープや穴あけパンチなど、子どもたちが使った経験のあるものを設定した。

【事例までの様子】 5歳児クラスになり、保育室前に広がっている森での遊びを活発に楽しむ。森に段ボール箱など持ち込んで基地を作って遊びを楽しんだり、虫などの生き物や遊びに取り入れるような自然物を見付けたりする。また、校務支援員が竹を切るところを見て、やってみようと思ったり、竹を遊びに使うイメージを広げたりする。プールでの遊びが始まることが分かり、「プールで遊ぶおもちゃを作りたい」という思いが湧いてきて、船や興味をもった生き物など作り始める。

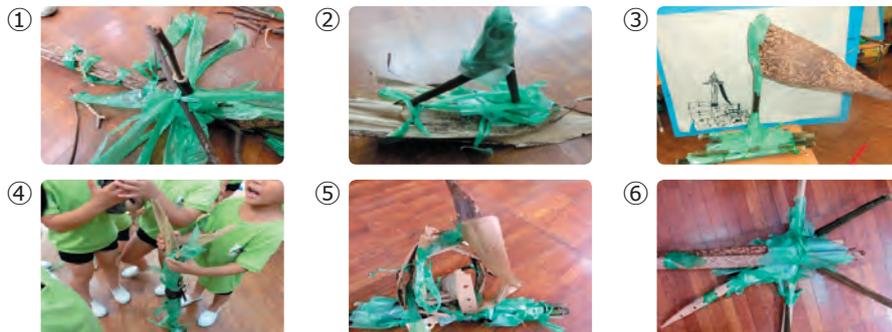


事例 「ザリガニ作り」

【場面 1】 プールで遊ぶおもちゃを友達と一緒に作る (援助：イメージの共有や作業の様子を見守る)

- ①かっこいい船
- ②棒が立った船
- ③旗がついた船
- ④ハサミが強いザリガニ
- ⑤カタツムリ
- ⑥アメンボ

その他、背の高い船、ダンゴムシ、クワガタなどの面白いおもちゃができる。



【場面 2】 プールでおもちゃを浮かべる (援助：みんなで見合う場面をつくり、つなぐ)

「プールでちゃんと浮かぶかな」「上手くいくといいな」と、みんな願っている。そのため、子どもたちはおもちゃができた翌日、雨天でも、「雨合羽を着たら大丈夫」と張り切って、プールに作ったおもちゃを浮かべる。子どもたちは、自分のものも友達のものも、おもちゃを水面に置くとどうなるのか、集中して見た。

アメンボは、本物のように抜群の安定感で浮き、堂々と進んでいく様子にみんなは、魅力を感じていた。その中で、「ザリガニが浮いて嬉しかった」という感想を聞いた A さんが、「でも、ザリガニって水の下に沈んでいるんじゃない?」と話す。また、カタツムリ作りのグループは、「自分たちが乗れるカタツムリを作りたい」と言う。

「嬉しい」「ドキドキした」「ちょっと壊れたけど、できて嬉しい」「棒(竹)が倒れたり、ぺちゃんとなって、思うようにはいかなかったけど、沈まなくてよかった」「拍手をもらえた」「アメンボがすごかった」



【場面 3】 沈むザリガニを作ろう① (援助：環境を工夫し発想や考えを引き出す)

プールに浮かべた後もおもちゃ作りが継続し、「乗れるカタツムリ」「乗れる船」「スイーツと進むアメンボ」「沈むザリガニ」「樹液を飲むカブトムシ」など、新たな目的が生まれた。様々な素材に触れ、素材を分類整理したことで、工夫して製作する姿が見られる。

ザリガニ作りをする B さんは、プールでペットボトルに水を入れ替えて遊んだ時、友達のペットボトルは浮いているのに自分のものはちょっと沈んでいることや、ペットボトルが水面で立つことを不思議に思い、友達のものと比べて、「わかった。水を満タンにしたら、下まで沈むんや」と気付いた。ペットボトルに入れる水の量の違いで、沈み方に変化があると気付いた B さんの姿から、ザリガニ作りグループの子どもたちは、ザリガニの胴体にペットボトルを選んだ。次に、ザリガニのハサミにこだわり、牛乳パックでハサミを作り、ペットボトルの胴体に付けて完成させた。しかし、試してみると沈まない。

【場面 4】 沈むザリガニを作ろう② (援助：友達の工夫に気付くよう示す。考え合い、できたことを認める)

次に、子どもたちは卵パックを選んだ。卵パックは、繋ぎ目で開閉するので、ハサミにちょうどいいと考えた。C さんが、卵パックの 1 つの穴にちょうど入る重りを見付け、入れてみる。「ザリガニのハサミになった」と言い、重りを選んでいる。上から透明テープを貼り、赤い重りが見えるようにしている。また、牛乳パックで作ったザリガニのハサミをさらに半分に切り、重りを付け、タフロンテープや透明テープで固定し、「これもザリガニ」と嬉しそうに言う。お互いのやりとりから考え直したり、作り替えたりすることで、重くなると同時にザリガニらしくなることを、子どもたちは喜ぶ。

プールで試す。最初は浮いたものの、ザリガニはゆっくりと沈み、完全に沈むとみんな嬉ぶ。



【考察】 保育者は、「科学する心」が育まれる体験を 4 つのキーワードで表わし、意識して子どもの姿に寄り添うことで具体的な言動を見取り、記述することに繋がった。子どもたちは、「プールで遊ぶおもちゃ」→「水に浮くおもちゃ」→「思いを実現できるおもちゃ」作りへと遊びが深まり、思いが実現し満足するまで遊ぶ体験をしている。思うようにならない場面では、子どもたちが試行錯誤を重ね、考えを深めることで、「科学する心」が育まれる体験を捉えることができた。